巻頭特集 幕末動乱期の桑名藩

志を貫く藩主と揺れた国許の藩士たち

徳川幕府が政権を返上した大政奉還から今年で150年。その節目の年を迎え、桑名市博物館は10月21日より、特別企画展「幕末維新と桑名藩～一会桑の軌跡～」を開催する。企画展に先駆け、今号では幕末の桑名藩について概観してみよう。

「星野家資料　松平定敬写真」桑名市博物館蔵。向かって右側が松平定敬。定敬は弘化3（1847）年、美濃高須藩主・松平義建の八男として生まれた。実兄に尾張藩主となった徳川慶勝、一橋家当主となった徳川茂栄、会津藩主となった松平容保などがいる。幕末から明治維新にかけて、それぞれが大きな役割を担い、歴史に名を残したことから、のちに彼らは「高須四兄弟」と呼ばれた

京都所司代に任命され京の治安維持に努める

桑名藩では、寛政の改革を行った老中・松平定信の嫡男である定永が、白河から転封になって以来、松平越中守家（久松松平家）が歴代藩主を務めていた。安政6（1859）年、桑名藩主・松平定猷が死去する。しかし、定猷の子・万之助（のちの松平定教）が幼少だったため、高須松平家の定敬が婿養子として迎えられ、藩主に就いた。

時代は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れる幕末。天皇や朝廷が急速に政治的権威を高め、政治の舞台は京都に移っていた。元治元（1864）年、定敬は治安維持のため、京都所司代に任ぜられる。京都守護職である実兄の容保とともに、京都の警固にあたった。

やがて倒幕へと時流は大きく傾いていくのだが、この時期の京都の政局を約2年半にわたり掌握したのが「一会桑」である。徳川慶喜（禁裏御守衛総督・一橋徳川家当主）、松平容保（京都守護職・会津藩主）、松平定敬（京都所司代・桑名藩主）の三者による体制を指す。家名・藩名の頭文字をとった名称だ。徳川幕府を代理する立場ながら、孝明天皇からの信任が厚く、朝廷との協調を主策としていた。その一方で、諸藩の国政参加を排除し、朝廷を独占する姿勢が、のちに薩長同盟を成立させることにつながる。

慶喜が第15代将軍を継いで以降、孝明天皇の崩御、大政奉還、王政復古の大号令と、幕末の動乱は一気に加速する。慶応4（1868）年1月3日、会津や桑名などの旧幕府軍と、薩摩、長州を中心とした新政府軍の間で、ついに戦端が開かれた。この鳥羽・伏見の戦いを皮切りに、国内を二分する戊辰戦争が始まった。

藩主・定敬が不在の中藩の命運をくじに託す

桑名藩は旧幕府軍の先鋒として奮戦した。当初は旧幕府側が有利に展開していたが、新政府軍に「錦の御旗」があがったことで、裏切りが相次ぐ。さらに慶喜は容保や定敬らを従え、軍艦で江戸に退却してしまう。戦闘意欲を失った旧幕府軍は戦いを放棄する。

鳥羽・伏見の敗戦と、藩主の江戸への脱出が伝えられた国許は混乱に陥った。藩主は不在、主力の軍兵は敗走中なうえ、「朝敵」の烙印まで押されてしまった。今後、藩としてはどうするべきなのか。江戸の定敬と合流して戦いを続けるか、新政府軍へ恭順するかの選択に藩は大いに揺れた。議論は尽きず、収拾が付かない。

藩祖を祀る鎮国守国神社でくじを引き、結論を出すことになる。結果は、江戸へ下る。ところが下級武士たちが反発し、前藩主夫人の珠光院が出席した御前会議にて結論が覆る。戦わずして城を新政府に明け渡すことに決まるなか、恭順を不服とする30人ほどの藩士が脱藩し、定敬のもとに向かった。

無血開城によって城下は兵火を免れた。藩士たちは城外の寺で謹慎となるが、それ以上の刑罰は科せられなかった。新政府軍は辰巳櫓を焼き払い、落城の証とした。

桑名市博物館 杉本竜館長
「定敬と容保は11歳の年の差があり、病弱な容保と比べ、定敬は馬術を趣味とするなど頑健な体をしていました。ただ兄弟仲は良く、それを示す和歌も残っています」

戊辰戦争の最後となる箱館まで抗戦を続けた

その頃、定敬は江戸・深川の霊巌寺で謹慎していた。国許の恭順決定の報告を受け入れながらも、徳川幕府への忠義、朝敵扱いされた怒りから、新政府軍に対して徹底抗戦の意を固める。桑名藩の分領地である柏崎に、定敬と付き従う桑名藩士が集結し、雷神隊、風神隊、致人隊を編成。旧幕府軍と協力して、北越戦争で新政府軍と激突した。雷神隊を率いた立見鑑三郎尚文の活躍はよく知られている。

会津、仙台と転戦し、榎本武揚が指揮する旧幕府海軍に合流して箱館に渡った。さらに定敬は上海へ赴くが、結局は横浜で降伏する。以後、自分のために戦って命を落とした家臣たちを弔って過ごしたという。明治41（1908）年、63歳の生涯を閉じた。

一方、桑名藩は明治2（1869）年8月、松平定教を新たな藩主に立て、6万石（5万石の削減処分）にて再興を許される。明治4（1871）年の廃藩置県で廃藩となり、桑名県、安濃津県を経て三重県に編入された。

近年、幕末から明治維新にかけての歴史が見直されている。桑名藩が一翼を担った一会桑勢力もそのひとつだ。このたびの企画展は、幕末期に桑名藩が果たした役割に光を当てるもので、藩主・松平定敬に関する資料など124件が並ぶ。ぜひ会場に足を運んで、これまであまり触れられてこなかった地域の歴史に目を向けてほしい。

1_桑名城本丸跡に鎮座する「鎮国守国神社」。幕末の桑名藩の運命を託したくじは、ここで引かれた　2_明治維新の際、桑名藩の全責任を一身に負い自刃した森陳明を顕彰する「精忠苦節碑」は、鎮国守国神社の前にある。明治23年の建立　3_桑名藩主の菩提寺「照源寺」。幕末の無血開城に貢献した珠光院もここに眠る　4_七福神まつりで知られる「十念寺」には、森陳明の墓がある

特別企画展「幕末維新と桑名藩～一会桑の軌跡～」

上）「禁門の変図屏風」（複製）会津若松市蔵。禁門の変は蛤御門の変ともいい、京都での復権を目指す長州藩と、幕府軍（会津藩、薩摩藩、桑名藩など）による武力衝突。敗北した長州藩の力が弱まり、かわって京都の政局を主導したのが一会桑勢力であった　左）「紫檀能尽蒔絵煙草盆」福島県立博物館蔵。会津藩主・松平容保が用いていた煙草盆で、能好きだった容保らしく、引き出しのつまみが鼓や笛の形をしているなど、能にまつわる意匠が施されている　右）藤堂家お抱えの刀鍛冶・廣山吉永の作。「津藩の須田市蔵の指料と伝わります。慶応3年の銘から、いよいよ時代がきな臭くなって来て、新たに刀を求めたものと思います」と杉本館長

◎場所／桑名市博物館（桑名市京町37-1）
◎日時／10月21日（土）～11月26日（日）9:30～17:00（入館は16:30まで）
◎休館日／月曜日　◎入館料／500円（高校生以上）
◎問い合わせ／0594-21-3171 ※10月22日（日）・11月5日（日）には展示解説を開催（13:30～）

文／長屋整徳　写真／桑名市博物館提供・田中慎介　デザイン／ABBEY ROAD